

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	イーディス・ウォートン,チャリティーと第一次大戦：『戦うフランス (Fighting France)』における前線への旅
別タイトル	Edith Wharton, Charity and the World War I : A Journey to Front Lines in Fighting France
作成者 (著者)	三輪, 恭子
公開者	東邦大学
発行日	2022.02.22
ISSN	03877566
掲載情報	東邦大学教養紀要. 53. p.41 49.
資料種別	紀要論文
内容記述	論文
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/toho.liberal.arts.rev.53.41
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD99080959

イーディス・ウォートン, チャリティーと第一次大戦 ——『戦うフランス (*Fighting France*)』における前線への旅

三 輪 恭 子

Edith Wharton, Charity and the World War I
—A Journey to Front Lines in *Fighting France*

Kyoko MIWA

1. 序

19世紀末から20世紀前半に活躍したイーディス・ウォートン(1862-1937)の作品は、物語の展開や当時の世相の描写が巧みであったあまりに、そして女性作家だったために、ヘンリー・ジェームズやセオドア・ドライサーなど同時代の男性作家に比べるとその評価は低くなりがちだった。しかしフェミニズム文学批評の隆盛と共に白人男性中心の文学史を見直すようになった1980年頃からウォートンの作品は再評価されるようになる。現在ではウォートン作品が通俗小説と見なされることは、ほぼなくなったと思われる。彼女とジェンダーの関係を論じるにあたり多く注目されたモチーフには、彼女が生涯興味を持ち続けた家という空間、ニューヨークのアップークラスという彼女の属していた背景、作品に生き生きと描かれた当時の社会の流行や様子などが挙げられる。先行研究の中でも、いまだに他の研究者に重視されるジュディス・フライヤーの『好ましい空間 (*Felicitous Space*)』(1986)は、女性が自分を解放し自らが支配できる場所について論じている¹。この段階では、ウォートン研究の主な論調は女性という性、男性優位社会の中での女性の生き方といったものである。

しかしジェンダーが社会的に規定された性である以上、ジェンダーを論じる時は常に社会的政治的な視点が含まれる。文学と同様に1970年代から、政治経済といった社会科学研究もジェンダーという視点により見直しが進められてきた中、近年の文学批評において社会文化的要素の占める割合が多くなってきたのは必然の流れだろう。先端の米文学研究で知られるウォルター・ベン・マイケルズは『われらのアメリカ (*Our America*)』(1995)の中で、他の作家に比べるとウォートンは、国民という意味であれ人種という意味であれアイデンティティへの関心が薄いと評した²。生涯を通じてアメリカよりヨーロッパを好み、後半生はフランスで過ごしたウォートンのコスモポリタンのな生き方を考えればもっともな意見である。マイケルズはウォートンが人種を扱わないと否定したものの、人種という切り口から彼女の作品を見ると

¹ Fryer, Judith, *Felicitous Space: The Imaginative Structures of Edith Wharton and Willa Cather*. (Chapel Hill: The University of North Carolina P, 1986).

² Walter Ben Michaels, *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism* (London: Duke U P, 1995)8.

いう論点にウォートンを置いたと言う意味で画期的だった。1990年代以降のウォートン研究には、社会進化論や経済システムなどの政治性の強いテーマも取りあげられるようになっていく。

筆者は、ウォートンの作品に小さくではあるが頻繁に描かれる慈善（チャリティー）活動や弱者救済の仕組みに注目し、その対象になる女性あるいはその担い手である女性の姿を浮き彫りにしたいと考えている。その理由はこれら救済手段の対象たる弱者には往々にして女性が含まれるため、そしてアメリカの慈善や福祉は女性が組織し中心的存在となっていたという興味深い歴史的経緯があるためである。慈善、および1920年代から発展していく福祉制度は、国が作られ発展していく過程で整えられていった共同体の行動原理や社会の共通意識をよく反映するものだ。したがって福祉という視点は、私たち日本人がアメリカ社会をより深く理解する糸口を提供してくれるだろう。本論では一連のウォートン作品と福祉の関係を論じる端緒として、ウォートンが精力的に慈善活動に関わっていた第一次大戦中に出版された『戦うフランス（*Fighting France*）』（1915）を中心に考察したい。

2. アメリカ社会と慈善活動

アメリカ合衆国の福祉についての感覚は日本とはかなり異なる。イギリスでエリザベス一世のもと救貧法が完成し、国家が盗人や貧者への対応を定めたのが1601年だったのに対し、イギリスから救貧の概念は受け継いだものの、アメリカでは300年にわたり社会福祉は地域の問題とされてきた。失業保険制度を含めた社会保障法が1935年に成立するまで国家レベルの福祉制度は存在せず、弱者対応は州が、遑って入植時代は共同体が担うものだった³。この状況は、新大陸に渡った人々が王や貴族に支配されるヨーロッパとは異なる社会—共同体の構成員（市民）が共通の利益を追求し作り上げていく社会—を創出したいという理想を追求した結果である。小さな集団の意見が尊重される分、負う責任も発生するわけである。この理想は各人の意見を尊重し政治に参加する権利を与える平等、そしてデモクラシー（民主主義）の理念にも通じる。現在でも、連邦政府と州政府の意見が対立した場合は、州が連邦に一方的に従うのではなく両者の意見が共通の利益を目指して調整される。

1835年に著した『アメリカのデモクラシー（*Democracy in America*）』でトクヴィルは、アメリカ社会に有象無象にある「結社」組織に注目している。一つの目標のために人々が手を結ぶこの仕組みはアメリカのみに存在するわけではない。彼が指摘するのは、政治のみならず、学校の創設や祭りの実施、書物の頒布といった「どんなに小さな事業にも団体をつくる」というアメリカに特有の現象だ⁴。結社の仕組みは社会福祉にも適用され、民間による福祉事業が現在でも多数存在する⁵。たとえば「フィランソロピー（博愛）」と呼ばれる、20世紀前半に設立されたカーネギーやロックフェラーといった財団の活動などである⁶。労働者を管理し冷酷に富を求める資本家がフィランソロピーを実践するのも不思議な取り合わせに感じるが、ア

³ アメリカ合衆国の成立と福祉の関係については David Wagner, *The Poorhouse: America's Forgotten Institution* (Lanham, MD: Rowan & Little Publishers, Inc., 2005) を参照。

⁴ アレクシス・ド・トクヴィル, 『アメリカのデモクラシー 第二巻(上)』(岩波文庫: 2008) 189。

⁵ 後藤玲子, 『新世界の社会福祉 第六巻 アメリカ合衆国/カナダ』(旬報社: 2019) 39-41。

⁶ チャリティーとフィランソロピーは同義で考えることも可能だが、前者は善意に基づいた個人の行為、後者は効率的に結果を出せる組織的な社会事業とされる。Robert A. Gross, "Giving in America: From Charity to Philanthropy," Lawrence J. Friedman, Mark D. McGarvy, Eds, *Charity, Philanthropy and Civility in American History* (Cambridge, UK: Cambridge U P, 2003), 30-1。

メロカでは成立する。持てる者は社会のリーダーとしての名誉を享受できる。しかし裏を返せば彼らは稼いだ富を放出し社会に還元することで矜持を保つ義務を負っている。

歴史的に見ると財団のような規模で資金を提供できる女性は少なかったが、女性たちも慈善活動の長い伝統を持っている。その契機は南北戦争である。負傷兵の手当や募金活動に携わり、女性は家庭を出て社会に直に貢献する機会を得た。それ以降、衛生、貧者救済、児童の養育環境、シングルマザーといった社会問題に対処する小さなクラブが各地で作られるようになる。ローカルな集まりが次第に全国組織のネットワークに発展することもあった。女性による慈善活動の大きな特徴は、金銭の代わりに時間と労力を提供したことである。つまり主な担い手は余裕のある中流以上の白人女性だった。彼女たちは募金を集め、救いの必要な人々に自ら手を差し伸べた。現在の社会福祉を支えるケースワークという技術は、ラッセル・セイジ財団のもと、女性が現場で培ったノウハウを体系化したものである。こうしてボランティア女性による慈善活動は、1930年代に専門家による公共サービスとして社会制度に置き換わることになる。慈善が福祉になり、行政が管轄するようになるまでに、民間人の女性が事業を肩代わりし基盤を整えていたという現実を目を向けると、女性の社会への影響力や有能さが浮かび上がってくる⁷。

ウォートンが生きていた19世紀から20世紀への世紀転換期は、「婦人クラブ (Women's Club)」が数多く作られた時代である。読書と社交を楽しむ集まりとして始まった集まりだが、次第に下層の女性を教育しようという社会改良の側面も持つようになった⁸。ウォートンの義姉メアリー (ミニ)・キャドワレイダー・ジョーンズは、「働く女性のクラブ (Working Girls' Club)」の組織と運営の心得についてのエッセイをチャールズ・スクリブナーズ・サンズ社から出版している。ウォートンもこの出版社から作品を発表しており、ミニが実兄と離婚した後も親しかったことから、このエッセイを読んでいた可能性は高い。ジョーンズによるとクラブの目的は、読書や富裕層の婦人による薫陶を通して労働者階層の女性たちが「厳しい生活の重荷や誘惑に心明るく立ち向かえる」よう導くことだという。自分たちが手本だというエリート意識は当然のものと想定してのクラブ運営だが、利他的精神から生じたものであることは紛れもない事実である。このエッセイには、不自由なく育った娘たちが、「生活の大変な側面に直面している」同じ年ごろの女性と触れ合うのは良い経験になるという記述もある。慈善とは階層の垣根を超えた両者の接触が生じる場でもあるのだ⁹。

ウォートンの慈善に対する姿勢はというと、ハーマイオニー・リーによるウォートンの伝記を参照しても、第一次世界大戦中を除きウォートンが積極的に慈善活動に関わっていたとする記述は見当たらない。しかし義姉など周囲との関係から推測すれば、基本的な関心や寄付などによる関わりはあっただろう。1905年に出版されベストセラーになった『歓楽の家 (*The House of Mirth*)』には「ガールズ・クラブ」への言及がある。登場人物の一人ガーター・ファリッシュは、乏しい財産をやりくりする生活を送る中でクラブを献身的にサポートしている。アッパークラスのパーティー会場での彼女はどのように語っている。

⁷ 女性と福祉については以下を参照。Kathleen D. McCarthy, "Women and Political Culture," *Charity, Philanthropy and Civility in American History*, 179-97. Linda Gordon, *Pitied But Not Entitled: Single Mothers and the History of Welfare 1890-1935* (Cambridge, MA: Harvard U P, 1994) 67-84. なお、中流以上の白人女性以外に黒人女性などもネットワークを形成したが別個の活動をしていたため、研究者は人種や社会階層ごとに言及するのが常である。注目されるようになったのが比較的近年だからである。

⁸ 山口ヨシ子、『ワーキングガールのアメリカ——大衆恋愛小説の文化学』(彩流社、2015) 104-8.

⁹ Mary Cadwalader Jones, "Working Girls' Clubs," *The Woman's Book, Vol. II* (New York: Charles Scribner's Sons, 1894) 201-10.

ジョージ・ドーセット夫人の真珠を見てごらんなさいな——一番小さいのでもガールズ・クラブの部屋代を一年間払えると思うわ。クラブのことで文句を言わなきゃと思っているわけじゃないの。皆さんびっくりするほど親切でいらっしやるのよ。リリーが300ドル出してくれたことは言ったかしら？ 素晴らしいじゃない？ それから彼女はお友達からたくさんのお金を集めてくれたの——ブライ夫人は500ドル、ローズデールさんは1,000ドル¹⁰。

ディモックは『歓楽の家』論によると、作品における価値観は「あらゆるものに値段があり支払う必要がある一方、あらゆるものが現金の代わりに金として勘定される。このような方法が施行され、社交上のふるまいは当初の意味を失い交換価値として現れる(784)」とされる¹¹。寄付という行動は名前が挙がった人々にとっては自分が親切だと示すための身振りである。クラブ見学に実際に足を運んだとガーティーが言及するのは主人公のリリー・パートのみだ。そのリリーも、経済的な余裕がないのに300ドルも出してみせたのは体面を保つ目的の方が大きいと言えよう。ウォートンが慈善活動にのめりこまなかったのは、このような冷めた視点ゆえかもしれない。ガーティーが話しかけているローレンス・セルデンはウォートンの価値観が投影されている人物だが、しばしば「超然と(aloof)」という言葉で表現される。彼は周囲と一定の距離を保って状況を俯瞰する立ち位置を気に入っている。慈善に携わる女性は決して主人公にならないが、ウォートンの初期から晩年の作品に至るまで諸所に登場することを考慮するとこの作家が絶えず慈善というものを意識し観察していた可能性は高いだろう。

3. 第一次大戦下のウォートンと慈善活動

ではウォートンが例外的に深く慈善に関わった数年間を、戦場ルポルタージュ『戦うフランス』を中心に見ていきたい。1914年7月、ウォートンはフランスの第一次大戦参戦に騒然とするパリにいた。1907年から12年にかけて徐々にアメリカからパリへ拠点を移し13年に離婚した彼女は、ヨーロッパに永住しようとしていた。1914年当時はイギリスの閑静な地にある家の購入を検討していたが、パリで開戦に立ち会い現地の混乱や窮状を見た以上はイギリスの平和を享受するよりフランスに貢献しようとして決意する。戦中はフランス赤十字や長年の友人ウォルター・ベリー(1916年から在仏アメリカ商務省の責任者)と協力しながら、生活苦の女性のための作業場作り、ベルギーからの避難民のサポート、病院設立、アメリカからの寄付金集めなど精力的に活動した。「超然」とした位置を好んだウォートンだが、完璧主義と大変なエネルギーの持ち主でもある。当時の手紙には「私はフィランソロピーに慣れていなくて」と書かれているが、どうしたらこれほど多くの病院や施設を作れるのかと舌を巻くほどの手腕を発揮した¹²。1915年、ウォートンはフランス赤十字から、野戦病院への物資運搬と視察を依頼される。作家としての力量と所有する自家用車を当てにされてのことだ。

ウォートンは1915年の間に5度、病院や戦場を視察する旅をし、同年発行の『スクリブナーズ・マガジン(Scribner's Magazine)』に4本の記事を寄せた¹³。これらの記事は15年末に『戦

¹⁰ Edith Wharton, *The House of Mirth* (New York: Charles Scribner's Sons, 1905) 213-4.

¹¹ Wai-Chee Dimock, "Debasing Exchange: Edith Wharton's *The House of Mirth*," *PMLA*, Vol. 100, No. 5 (Oct., 1985), 783-792.

¹² Edith Wharton, *The Letters of Edith Wharton*, Eds. R.W.B. Lewis and Nancy Lewis (New York: Charles Scribner's Sons, 1988) 341.

¹³ Hermione Lee, *Edith Wharton* (New York: Alfred A. Knopf, 2007) 486.

うフランス』にまとめられ出版された。本書から感じられる一つの印象は、ウォートンが前線という場に強烈に引きつけられ、可能な限り近くまで行こうとしていたことだ。ただしあくまで民間人として安全な場所を保持してのことである。ウォートンだけではなく一次大戦の前線を訪れた作家は、戦闘が止む間に案内されたという。まして外国人で著名人だったウォートンの安全は相当の配慮がされていたろう。しかし女性の身で、万全の保証がない中で、危険を冒して旅をしたのは驚くべき勇気と言わざるを得ない。その目的は他の戦争ジャーナリストと同様、戦場のリアリティを記録し伝えることだった。『戦うフランス』を構成する6章の中心的題材は以下の通りである。(1) 宣戦布告時から数カ月間のパリ、(2) 病院、(3) 第一線の塹壕、(4) 破壊され死んだようなイーブルの町、(5) フランスがドイツから奪還したアルザス地方、(6) フランス人の精神。第3章のみならず、視察旅行を記した第2章から第5章の4つの章全般で前線や塹壕への言及がある。ウォートンは荒廃した町や村を通り抜け、時には爆撃を経験し、そこで暮らす人々の話を聞き、戦場という現場に向かう。旅路を経て読者の視線は、対峙するドイツ軍とフランス軍つまり戦争が起きている「現場」、そして過酷な状況を直に経験している兵士たちに向けられる。

第4章「北部にて」では、彼女たち一行はパリより北のロレーヌ地方へ向かう。国境を越えたベルギーの町イーブルは、ドイツ軍の激しい攻撃を受け壊滅的な状態にあった。町に近づくと、同行の幕僚に到着まではクラクションを鳴らさぬよう注意を受ける。平野の向こうで見えないが、ドイツ軍の戦線が控えているからだ。遠方に見えていた低い家並みと思っていたものが、たどり着いてみるとイーブルの町である。建物が破壊され焼け落ちていたからだ。

ロレーヌ地方の町々は爆撃され、焼け落ち、地上から念入りに消し去られた。最悪の場合には石切り場同然、最善でもボンベイのようだった。しかしイーブルは、砲撃により死に至らしめられていた。家々の外壁はまだ残っていたため、遠くからは生きている都市の様相をぼんやりと呈していた。近づくと内蔵を抜かれた死体に見えた¹⁴。

民間人が避難して人気がなくなった空間は、静けさと空虚さを際立たせる。死体にたとえられた建物が、そこにいたはずの人間が遭遇した悲劇をも想起させる。流血や死体の描写なく惨状をリアルに伝えてみせる作家の技量が発揮されている。他方で戦争ルポルタージュとしては生ぬるいという評価もできるだろう。このような婉曲的な描写は、作家が体験者ではなく安全な位置から見る観察者であることからくる問題——現実と観察者との乖離という問題が根底にあってのものだ。

ギャラガーは戦場について書く女性について論じている。男性ではなく女性で、兵士ではなく民間人で、観察される側ではなく見る側である女性作家の体験は間接的なものにとどまる。作家は特権的立場を得るため現場へ赴き、目撃者になり、聞き手（読者）と戦闘員の距離を仲介し、語り手としての権威を確保しようとする。しかし彼女たちが男性戦闘員の直接体験を記述することには限界がある。戦闘場面取材し記事や小説にした男性作家は、血なまぐさい場面から距離のある女性作家よりは体験者に近いと言えるが、それでも彼らとて観察者でしかない¹⁵。第3章

¹⁴ Edith Wharton, *Fighting France: From Dunkerque to Belpport* (New York: Charles Scribner's Sons, 1915) 153. 以下FFと省略。

¹⁵ Jean Gallagher, "The Great War and the Female Gaze: Edith Wharton and the Iconography of War Propaganda," *LIT*, Vol. 7, 1996, 27-49.

「ロレーヌとヴォージュ山脈にて」では、ウォートンはある村の丘からドイツ軍の前線を見下ろす。

橋の残骸以外に私たちが戦争の際^{まわ}まで来ていると示すものはなかった。強風のせいで砲撃はできなかった。私たちの足元に見るホスピスの屋根のすぐ後ろの森に銃をみっしりと立てたドイツ軍の塹壕があちこち掘られ、谷の向こうの斜面一つひとつに大砲の目が眠りもせずに見つけているとは信じられなかった。(中略) 見れば見るほど、見えない敵が重苦しく脅威に感じられた。「ほらあそこにいます——あそこ——あそこにも」(FF, 109)

戦闘がないと見込んだ時間とはいえ、外国人女性が最前線にここまで近寄るには覚悟が必要だったろう。「あそこにいる」という言葉はこの場面で4度繰り返される。実際の戦闘まで達することができない状況で恐怖を伝えるためにウォートンは、平穏な日常性と非日常性を併存させる。戦争があるとは思えない穏やかな静けさの中で死がふと顔を覗かせる。死は身近で、いつ来ても不思議ではないのだ。日常を裏切るように不意に露わになる恐怖は、彼女が得意とした幽霊譚の手法と似ている。引き続き視察したフランス軍の塹壕の場面で、ウォートンは作中に唯一登場する人間の死体を見る。ドイツ兵の死体は、自国軍も回収に行けない谷底に遠く小さく横たわっている。注目しておきたいのは、ウォートンが死体ではなく「腹わた」と呼ばれる塹壕を抜けていく間の暗闇の恐怖を強調していることだ。見えない怖さが長く続いた後、明るい場所に出て見つけた敵の死体を見つけた彼女は、安堵さえ感じる。ここでも兵士の真の恐怖である死とウォートンの感覚には距離がある。ウォートンの恐怖は兵士のそれとはずれている。

見るという行為をどの作品でも意識して描写するウォートンは、対象と自分との距離を十分意識していただろう。兵士の恐怖を想像して書く欺瞞を避け、自分の感覚を誠実に伝えようとしたと評価するのが妥当ではないだろうか。最前線まで旅をしたウォートンの熱意は、1918年まで参戦せず戦場から遠く離れていたアメリカに恐怖や危機を理解してもらうためだった。それには現場の恐怖や悲惨さをリアルに伝える必要があった。本の目的はアメリカ人の関心を引き支援金を集め、パリでの慈善活動を継続させることだった。ただパリに滞在するのではなく、自ら直接慈善に関わったことで現場の窮状を自分事として実感してもらいたいだろう。1916年には著名人の詩を集めたチャリティー本『家なき人々の本 (The Book of the Homeless)』を出版している。

第一次大戦時のウォートンは、彼女には珍しく冷静かつ中立的な、少し離れた立ち位置を保てなかったようだ。戦争中の執筆・出版で、プロパガンダ的意図があったとはいえ、『戦うフランス』においてフランスのナショナリズムを鼓舞する様は、アメリカ人としてはやや過剰にも感じられる。視察に出発した頃のウォートンの手紙には「ぞくぞくする」とあり、戦争への不安より旅への高揚感が先に立っている¹⁶。第1章「パリにて」の第1節では、開戦前後数日間のパリがこのように書かれる。

過酷になったここ数ヶ月から振り返ってみると、パリの最初の数日は、重厚な建築物と夏

¹⁶ Lee, 486., Julie Olin-Ammentorp, *Edith Wharton's Writings from the Great War* (Gainesville, FL: U P of Florida, 2004) 37.

空の中で理想的かつ抽象的な光を帯びている。愛国生活という炎が突然燃え上がり、あらゆる小さく些細な仕事が中断したことで、道義的判断力は、通りが掃除されたように一掃され、見物人は現実に直面しているというより、あたかも「戦争」についての偉大な詩でも読んでいるような気にさせられた。(FF, 15)

「詩」という言葉は人々の現実感のなさをよく表現している。彼らはまだ真の意味で戦争に参加できていない、物見遊山の「見物人」である。第一次大戦は、塹壕戦や毒ガス使用といった近代戦の礎とされ、4年にわたり甚大な被害をもたらした。しかしその始まりは「予期せぬ大戦」「急展開」といった言葉で紹介されることが多い¹⁷。オーストリア帝国がセルビアに宣戦布告するのはサラエボでのフェルディナンド大公夫妻暗殺事件からわずか1ヶ月のことだ。オーストリアの宣戦布告からフランスも1週間経たずして参戦している。平和な日常生活は突然戦争に染め上げられ、人々は急激な変化に現実感を持てなかった。総動員令の出た8月1日の夜にパリの人々がフランス国歌ラ・マルセイエーズやイギリス国歌を繰り返し歌っていたのが、ウォートンには強い印象として残ったらしい。『戦うフランス』のみならず、回想録『振り返りて (A Backward Glance, 1934)』にも記している。幼少期から自国よりヨーロッパを愛したウォートンだが、この開戦時にはパリ市民たちの熱狂に流されて、自身も浮足立った気持ちになっている。

しかし宣戦布告から時間が経つと、ウォートンは興奮しつつも冷静な部分を取り戻す。フランスを俯瞰的視点から評する記述がところどころ見られるようになる。不安定さと冷静さの混在は、彼女がフランスの異邦人であることに起因するだろう。下の引用は開戦から半年経過した1915年2月時点、第1章第3節でのパリである。

ロマンスのような最初の輝きと身震いはほとんど消え去ってしまった。あるいは少なくとも、次第に日常が戻ってくる様を見ていた者にとってはそのように思われた。外国から来た傍観者からは違うように見えたかもしれず、まして戦争に巻き込まれた人々には一層異なって見えているかもしれなかったのだが。(FF, 31)

国民総動員法下にあるものの、パリでは店が再開し劇場での催しも行われていた。市内に軍が入ることは少なく、パリジャンは戦争をあまりリアルには感じられなかった。この日常性は意図的に演出されたものである。ドイツ軍がパリの間近まで迫ることもあった中、パリだけは動じないという体を装わねばならなかった。首都まで混乱を示しては国全体が意気消沈しかねなかったからだ。一方でパリは外国人に別の側面を見せていた。ウォートンたちは身元証明や電信、送金を厳しく監視され、一時は生活費を払うにも支障が出るほどだった。彼らには表面的に取り戻される日常と、その陰で続いている非日常の両方が見えていた。戦争という非常事態を日々実感させられていたのである。しかし強いられた不便さをウォートンは、外国人ならではの視点からフランスや戦争を描くことができるという利点に転換する。この引用からは、フランス人よりもフランスのことが多面的に見えているというウォートンの自負が込められているのではないか。

この章は、彼女の慈善事業も微かに示唆している。第三の視点を持つ、戦禍から逃げてきた

¹⁷ 山上正太郎、『第一次世界大戦——忘れられた戦争』(講談社学術文庫, 2010) 24. など。

外国からの難民に注目してみよう。彼らの母国は明記されていないが、当時とりわけベルギーから大勢がパリに押し寄せていた。彼らは急場しのぎのシェルターに身を寄せ、パリジャンのように買い物をする事も叶わなかった。ウォートンがもっとも力を注いだ慈善事業の一つが、こうしたベルギー難民の救済だった。『戦うフランス』でほんの少し言及されるだけの難民のいる所が、ウォートンが直接かかわる「現場」だったのだ。その資金を得る手段は、間接的にできる経験を限界まで追及した前線への旅だった。

大戦後のウォートンは慈善と積極的な関わりを二度と持たなかった。事業に没入し過ぎるあまり、精神的にも肉体的にもひどく消耗したためだ。1916年半ばからは頻繁に体調を崩した。1917年にはアメリカがついに参戦し、ヨーロッパに入ったアメリカ赤十字は既存の慈善活動を引き取ってしまう。ほとんどの事業を手放し、ウォートンは非常に気落ちしたという¹⁸。慈善自体も清廉潔白なことばかりではなく、資金集めに奔走するウォートンの頭痛の種だった。持ち逃げされたこともあった。大戦終了時には彼女は燃え尽きていた。

4. 結び

——ウォートンのジレンマ

戦後もウォートンはフランスに住み、アメリカに戻ることはほとんどなかった。4歳から10歳までをヨーロッパで過ごしたせいもあり、アメリカに愛着を持つことができなかつたようだ¹⁹。彼女の幼少期の生育歴と鋭い感受性が、距離をおき俯瞰的に物事を見る姿勢の礎になったのだろう。しかし自らを「アメリカにいながらにして亡命者」「ヨーロッパの温室に生まれた憐れな外来種」と称したように、彼女はどちらの場所にも所属できないジレンマを抱えていた。一方でそのジレンマは外国生活を経験し相対的視点を持てる強みと表裏一体でもある。ウォートンは「憐れな外来種」であると同時に、異文化接触を世に伝える使命を負ったコスモポリタンでもあった²⁰。

第一次大戦での強烈な体験は、異文化についてウォートンが深く考察するきっかけとなった。1919年には、フランス人の特性について考察した『フランスの流儀とその意味 (*French Ways and Their Meaning*)』を出版している。前書きでは外国人が他国人を理解し判断するのに、旅行者と移住者という二つの立場が挙げられる。

いったん観察者が表面的な違いを鋭く感じる楽しい時期を乗り越えたら、彼が真実に少しでも近づく唯一の方法とは旅行者の立ち位置を守り、比較しながら対象を見つめ続けることだ²¹。

自国と他国との違いに慣れる時が来ても、さらに深い理解を追及するために異邦人であることを意識し続けねばならないとウォートンは言う。表面的な相違点と類似点ばかりが目につく

¹⁸ Lee, 506-7., Carol J. Singley, *Adopting America: Childhood, Kinship, and National Identity in Literature* (Oxford, MA: Oxford U P) 200.

¹⁹ 当時の富裕層は慣習的に毎年春から初夏にかけての数週間から数ヶ月をヨーロッパ滞在に費やした。Greg King, *A Season of Splendor: The Court of Mrs. Astor in Gilded Age in New York* (Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc., 2009) 377. を参照。数年規模の滞在は稀だが頻繁なヨーロッパ旅行が特殊だったわけではない。

²⁰ Donna Campbell, "Foreword," *Edith Wharton and Cosmopolitanism*, Meredith L. Goldsmith and Emily J. Orlando Eds. (Gainesville, FL: U P of Florida, 2016) ix-x.

²¹ Edith Wharton, *French Ways and Their Meaning* (New York: D. Appleton and Company, 1919) vii-viii.

時期から、その国に慣れてくると以前は気づかなかった深層にある、種が異なるための属性と
思っていた相違点を実は同じ根から分かれ出ていたことに気づく。各国の特徴は時を経て発展
した末に、それぞれ固有の種にしか見えなくなったに過ぎない。ゆえに特徴づけて国を理解し
ていくことは有効な手段ではある。ただし、あくまで自分の意見に留めておくべきで、決定的
事項としてはならない。このように留保をしながら、最初の理解の上に新しく得た理解を積み
上げ考え続けることをウォートンは勧める。そのためには「旅行者」の立場を守らねばなら
ない。外国に同化しすぎず自国と他国を別の物と決めつけず、「憐れな外来種」として離れた位
置に孤独に立ち続けねばならない。

『フランスの流儀とその意味』はアメリカ人にフランスを理解してほしいという願いで書か
れたが、アメリカ人には結局伝わらないと、ウォートンはもどかしさを感じていた。当時のア
メリカ人はヨーロッパに旅行しても自国民で固まり、異文化との接触を避けようとする保守
的、防衛的な姿勢を取る者が多かった。同時期に構想、執筆された中編小説『マルヌ川 (*The
Marne*)』(1918)には、フランス帰りのアメリカ人を主人公に据え、フランスへの思慕、フ
ランス人に同化しきれないもどかしさ、そして他国を理解しようとしめないアメリカ人への批判が
書かれている。トロイ・ベルナップは第一次大戦勃発に伴いフランスから帰国する。しかし母
国では「私たちの戦争ではない」と関心が薄く、フランスに強い憧れと同情を持つトロイは苛
立つ²²。彼の苛立ちはウォートンのものでもある。ここに描かれる慈善はアメリカの鈍感さに
皮肉をこめる小道具として登場する。ベルギーの戦争孤児に送るプレゼントには、無神経にも
「幸せなアメリカの子供より」と書かれたカードが添えられる (*The Marne*, 33)。

ウォートンの皮肉はここで止まらない。ヨーロッパの「現場」にいたトロイ達も、浮ついた
アメリカ人と大して変わらないことが示される。フランスで兵士の墓や戦場跡を見てきた話
は、帰国直後は母国の人々の大きな興味を引く。しかし新たにアメリカ人が帰国するにつれ、
人々の関心は次々と移っていく。

彼らは後から到着した者、前線のより近くにいた者、より多くの寄付金を集めた者、ある
いはベルギー女王に講演を聞いてもらった者、あるいは〔英国陸軍大臣〕キッチナー卿自
筆の手紙をもらった者にとって代わられた (*The Marne*, 36)。

フランスで感化され慈善に携わっていたトロイの母はほどなく、「話が尽き、冒険が尽き、
慈善が尽き」てしまう (*The Marne*, 35)。戦争の現場から遠く暮らすアメリカ人にとって戦争
体験談は消費される対象でしかない。前線に近づこうと奮闘していたウォートン自身を揶揄す
るかのような、幻滅し冷めた調子で物語は語られる。トロイの末路は哀れなものだ。15歳で
フランスを出国した彼は、マルヌ会戦に従軍した家庭教師の死をロマンチックな英雄の物語の
ように考える。少年の無邪気で単純な憧れを持ち続けた彼は、19歳になり二度目のマルヌ会
戦に身を投じるが、物語は彼の死を暗示して終わる。戦争という非常事態に影響され、二つの
国の間で揺らぎながら慈善活動や前線への旅に情熱を傾けたウォートンは燃え尽き、終戦直後
の段階では冷笑的な態度を隠せなかったのだった。

²² Edith Wharton, *The Marne* (New York: D. Appleton and Company, 1918) 37.